

琉球大学学術リポジトリ

北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都(5) : 宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-08-04 キーワード (Ja): 北魏, 孝文帝, 尚書省, 平城, 洛陽, 遷都 キーワード (En): 作成者: 長部, 悦弘, Osabe, Yoshihiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34805

北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都（５） —宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて—

長 部 悦 弘
Yoshihiro OSABE

The Secretary Department 尚書省 and Transfer of the Capital
from Pingcheng 平城 to Luoyang 洛陽 under the Reign of the
Emperor Xiaowen 孝文帝 at the Age of Beiwei 北魏

北魏孝文帝代は、北魏史上国家体制の一大転換点とみなすことができよう。476年に始まる文明太后馮氏の臨朝聴政下では、484年に班禄制を立て、485年に均田法を頒布し、486年に三長制を敷いた。490年の文明太后馮氏の亡き後、孝文帝親政下で491年に第1次、499年に第2次官制改革を各々遂行し、493年には洛陽遷都を敢行し、496年は姓族詳定を推進した。なかでも493年の平城から洛陽への遷都は、北魏史上領域支配体制の中心たる王都を『農業—遊牧境界地帯』から『農業地域』に移した一大事業であったと言える。

孝文帝が国家体制の中枢機関の1であった尚書省を最重視して、自身の手により人事を行った。かかる大事業を尚書省を基軸に推進したとみられる。小論では、尚書省に人材を供給する役割を果たしたと想定される母体集団を含む北魏支配者層の、493年から495年にかけて敢行した洛陽徙住の経緯を、孝文帝の平城—洛陽行をも含めて検討した。

キーワード：北魏 孝文帝 尚書省 平城 洛陽 遷都

目次

序

第1章 孝文帝の尚書省重視

第2章 孝文帝代前期献文帝と文明太后の軋轢（471～476）

第3章 文明太后による献文帝の寵臣肅清（476～479）（1）

第4章 文明太后臨朝聽政体制の確立－文明太后集團の成立

第5章 孝文帝集團の成立

第1節 文明太后集團の継承と構成員に対する処遇

第2節 孝文帝集團の独自構成員

第3節 外戚李氏と馮氏の待遇（2）

第6章 孝文帝代の尚書省高官

第1節 献文帝実権期（471～476）

第2節 文明太后臨朝聽政期（476～490）

第3節 孝文帝実権期第1期（490～497）

A 洛陽遷都前（490～493）

B 洛陽遷都後（493～497）

第4節 孝文帝実権期第2期（497～499）（3）

第7章 孝文帝の行幸・親征行（4）

第8章 北魏支配者層の洛陽徙住－孝文帝平城－洛陽行を含めて（以上本号）

第8章北魏支配者層の洛陽徙住－孝文帝平城－洛陽行を含めて

孝文帝実権期第1期（490～496）に属する493年8月に、孝文帝は「南伐」という名目で平城を発つて、9月に洛陽に至って遷都を宣言したことは、周知の事柄であり、前に述べた。注意しなければならないことは、493年8月に平城を出発した際、その名目が「遷都」ではなく、「南伐」であったという点である。少なくとも、出発時点で平城から洛陽へ「遷都」することは公言したわけではなく、あくまでも「南斉討伐」が平城出立の表向きの目的であったのである。孝文帝自身が洛陽に向けて平城を立った後には、北魏国家の支配者集團構成員を含む住民中、名目上の「南斉討伐」軍に参加した以外の人々が、平城に残っていた。だが、単に住民だけではない。

遷都は、国家の総力を結集する必要がある一大事業だけに、一挙に成就したわけではない。（5）主要機関である尚書省を含めて、国家機構の諸機関が、平城から洛陽に一挙に引っ越したとみなすことはできない。政府諸機関の移動を伴う「遷都」を公に目指していたわけではない点から、尚書省を含む政府諸機関は平城を引き払ったわけではなく、当時同地に残っていたことは疑いのないところである。

493年9月に「洛陽遷都」を宣言した後、孝文帝には、新都洛陽城の建設とともに、尚書省をはじめ国家機構に勤める百官を含む、平城に残った住民に対して、洛陽遷都に賛意を得る説得工作、そしてかれらの洛陽への移住という事業が眼前に横たわっていたのである。平城住民の洛陽への移住は、495年9月庚午に六宮及び文武両官すべてが洛陽に移ったことにより、基本的には終わったと一応見なし得る。孝文帝の平城－洛陽間行幸は3回に亘る。この3回の行幸に随従して、洛陽へ移動したものが少なからず認められる。だが平城から洛陽への遷徙は、それだけに尽きるものではない。新都洛陽への平城住民の移動は、孝文帝の平城－洛陽間行幸以外の遷徙を含めて、1度ならず繰り返行われて完了したのである。

平城住民の洛陽への集団移住は、6度に亘る。第1次移動（493年8月～9月）・第2次移動（493年10月以後～494年7月以前）・第3次移動（494年10月～11月）・第4次移動（494年12月以後～495年3月以前）・第5次移動（495年5月以後～496年7月以前）・第6次移動（495年8月～9月）である。この内、第1次移動は第1回孝文帝平城－洛陽行、第3次移動は第2回孝文帝平城－洛陽行である。これらの2次の移動は、孝文帝と行をともしたのである。

第1次移動は、孝文帝の第1回洛陽－平城行である。既に述べた如く、「南伐」を名目とした親征軍であり、歩兵・騎兵、都合30万余りと号した（『北史』3魏本紀3 太和17年〔493〕10月乙巳の条）（6）

第2次移動は、元休（安定王）が大司馬として六軍を統率して第1次移動（第1回孝文帝平城－洛陽行）に従った後、493年10月に随従官を率いて家族を迎えに平城に赴き、翌494年7月に他界する以前に平城から随従官の家族を引率して洛陽へ赴いたとみられる移動である。（『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年〔493〕10月乙巳の条、『北史』3 魏本紀3 太和17年〔493〕10月乙巳の条、『魏書』19下元休伝、『北史』18同伝）移動者の人数は、不明である。

第3次移動は、第2回孝文帝の平城—洛陽行である。孝文帝が神主を奉じて494年10月に平城を発ち、11月に洛陽に到着した。〔魏書〕7下 高祖本紀下 太和18年〔494〕10月戊申の条・『北史』3 魏本紀3 太和18年〔494〕10月戊申の条、〔魏書〕7下 高祖本紀下 太和18年〔494〕10月辛亥の条・『北史』3 魏本紀3 太和18年〔494〕10月辛亥の条、〔魏書〕7下 高祖本紀下 太和18年〔494〕11月己丑の条・『北史』3 魏本紀3 太和17年〔493〕10月乙巳の条) 移動者の人数は、不明である。

第4次移動は、494年12月から495年3月までの間のいずれかの時期に行われた。493年7月に立后された廃皇后馮氏が立後の翌月に孝文帝が「南伐」を名目に平城を出発して、洛陽に向かった時には、平城に留まり、494年12月に孝文帝が第1回南斉親征行に出発から以後、495年3月兄馮誕、翌4月父馮熙の他界以前に洛陽へ六宮を率いて向かったものである。〔魏書〕13 孝文帝廢皇后馮氏伝) 移動者の人数は、不明である。

第5次移動は、495年5月から496年7月までの間のいずれかの時期に行われた。494年12月から495年3月までの間に廃皇后馮氏が洛陽に移動した後、孝文帝が495年5月に第1回南斉親征から洛陽へ帰還した後左昭儀であった幽皇后馮氏のために平城へ宦官の双三念を迎えに派遣して洛陽に招いたのに応じた移動である。〔魏書〕13 幽皇后馮氏伝・『北史』13 同伝、〔魏書〕13 廢皇后馮氏伝・『北史』13 同伝) 正確な移動時期並びに移動者の人数は、確定できない。廃皇后馮氏は、496年7月に幽皇后馮氏の讒言が切っ掛けで、廃位され〔魏書〕7下 高祖紀下 太和20年〔496〕7月の条、〔北史』3 魏本紀3 太和20年〔496〕7月の条、〔魏書〕13 廢皇后馮氏伝・『北史』13 同伝)、幽皇后馮氏が替わって497年7月に立后される〔魏書〕7下 高祖紀下 太和21年〔497〕7月甲午の条、〔北史』3 魏本紀3 太和21年〔497〕7月甲午の条、〔魏書〕13 幽皇后馮氏伝・『北史』13 同伝)。移動時期は、孝文帝が第1回南斉親征から洛陽へ帰還した495年5月以後、廃皇后馮氏が廃位される496年7月以前であろう。移動者の人数に関しては史乗に記述がないが、幽皇后馮氏の側近・護衛など、その地位から来る待遇に照らして、決して少ない人数ではなかろう。

第6次移動は、495年8月～9月に平城から残りすべての六宮・文武官が

洛陽に移動したものである。（『魏書』7下 高祖紀下 太和19年〔495〕9月庚午の条、『北史』3 魏本紀3 太和19年〔495〕9月の条）（7）

この他、平城から洛陽への移動として、大規模なものとして、平城から洛陽へ直接向かったのではなく、一旦他地を経由した集団が認められる。南斉攻撃別働隊である。

南斉攻撃別働隊は、車騎大將軍・都督関右諸軍事元幹（河南王、のち趙郡王）を総帥に戴いて、子午谷から南斉領の梁州・益州を目指して、493年8月に孝文帝の親征軍とは別個に平城を発った。同隊は、公称7万の兵卒から構成されていた（『資治通鑑』138 齊紀4 武帝永明11年〔493〕8月己丑の条、『魏書』21上元幹伝・『北史』19同伝、『魏書』42薛胤伝、『魏書』47盧淵伝・『北史』30同伝）。南斉領を侵す前に、既に493年7月に薨去していた南斉武帝の訃報が届いて、班師し（『魏書』21上元幹伝・『北史』19同伝）、途中493年9月に関中において涇州の羌の反乱を鎮定し（『魏書』47盧淵伝・『北史』30同伝）、各々雍州・秦州を拠点にしていた支西・王広の率いる反乱軍を長安において迎え撃ち、覆滅した。（『資治通鑑』138 齊紀4 武帝永明11年〔493〕9月の条、『魏書』42薛胤伝、『北史』36同伝には該当記事なし）。同隊の兵員は総帥の元幹（河南王、のち趙郡王）とともに、493年9月から494年2月までの間に、関中から洛陽へと着いたとみられる。（8）

幽皇后馮氏が洛陽へ行く第5次移動により、493年8月以来、2年に及ぶ、平城から洛陽への移住事業は基本的に終わりを告げたとみられる。要するに、平城住民の洛陽への移住は、孝文帝実権期第1期（490～497）内に完了したのである。

以上6次の直接移動に参加、あるいは第3地点を経由して移動した北魏支配者層の主要人物は、以下の通りである。尚、2回に亘って移動群に身を投じたものが認められる。

第1次移動に参加した主要人物は、胡族は宗室の元提（臨淮王）・元休（安定王）（1回目）（9）・元澄（任城王）（1回目）・元楨（南安王）・元鸞（城陽王）・元詳（北海王）（1回目）・元颺（彭城王）（1回目）、宗室以外の于烈（1回目）・宇文福・楊大眼、漢族は馮誕・李沖・劉芳・韓顕宗・李彪・張彝・崔光・成淹である。（以下、『北魏平城－洛陽直接移動者表』参照）

第2次移動では、漢族は主要人物中に確認できないが、胡族は宗室の元休（安

定王) (2回目) のみが認められる。

第3次移動は、胡族は宗室の元澄(任城王)(2回目)・元禧(咸陽王)・元雍(高陽王)・元羽(広陵王)・元詳(北海王)(2回目)・元魏(彭城王)(2回目)・元恂(廢太子)(10)・元徽・元景・元纂・元翰・元虬・元尉・元宜・元洛平、宗室以外の長孫臻(拔拔臻)・伊願(伊婁願)・独孤遙・穆亮(丘目陵亮)・穆純(丘目陵純)・穆惠(丘目陵惠)・于烈(2回目)・于勁(万恒于勁)・于矜(万恒乎矜)・于吐拔(万恒乎吐拔)・于澄(万恒乎澄)・陸昕之(陸昕)・陸怖道・李愨(大野愨)・陳益(侯莫陳益)・叔孫恬(乙旃恬)・叔孫免(乙旃免)・叔孫侯莫干(乙旃侯莫干)・閻麟(郁久閻)・宇文福(俟文福)・呂阿倪(俟呂阿倪)・羅吐蓋(叱羅吐蓋)・苟侯莫仁(若干侯莫仁)・叔孫忠仁(乙旃忠仁)・山萇命(吐難萇命)・閻敏(郁久閻敏)・斛律慮・莫悅(莫耐婁悅)・何舍(賀拔舍)、漢族は馮誕・李韶・李彥・盧淵・崔光・崔哲・崔広・崔逸・李預・李華・李引・李良軌・鄭長遊・王翔・劉芳・游肇(11)・游綏・公孫良・李堅・秦松・郭祚・董明忠・衛況・李循・公孫良・甄琛・双蒙・邢巒・魏祐・韋續・白整(白敕)・劇鵬・徐丹・張代連・張覃・張慶・傅永(傅脩期)・裴映・高觀・司馬定・朱孟孫・蕭彥・柳崇・成淹である。

第4次移動・第5次移動では、胡族が主要人物中では認められず、主要人物として確認できるのは、第4次移動では唯一人漢族の孝文廢皇后馮氏であり、第5次移動でも漢族の孝文幽皇后馮氏のみである。

第6次移動では、主要人物としては元贊が居たと推察される(12)。かれ以外には、胡漢両族とも主要人物が確認できない。

この他、495年5月に洛陽で他界した元諧(広川王)がその死去年からみて、第1次移動者群(孝文帝第1回平城-洛陽行)または第3次移動者群(第2回平城-洛陽行)の1人として移住したと考えられる。『魏書』7下 高祖紀下 太和19年〔495〕5月己巳の条、『北史』3 魏本紀3 太和19年〔495〕5月己巳の条、『魏書』20元諧伝・『北史』19同伝)

以上瞥見した洛陽への移住者は、平城から直接動いた人々であるが、他に孝文帝が「洛陽遷都」を宣した当時地方官であったり、あるいは孝文帝の親征軍の別働隊として孝文帝と並行して軍事行動に従って平城を離れたりしたなどの事情で、平城から一旦他の地を経由して洛陽へ赴いた北魏支配者層の重要

人物も、認められる。以下、かかる人物を確認しよう。

元幹(河南王、のち趙郡王)は、上述した如く、南齊攻撃別働隊として平城を立った後、関中を經由して、洛陽へ移ったとみられる。穆亮は西道都將に任命され、元幹(河南王、のち趙郡王)の副將として同行したが、孝文帝により召喚された。(『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年〔493〕10月戊寅の条、『魏書』105之4 天象志4、『北史』3 魏本紀3 太和17年〔493〕10月戊寅の条)(以下、『平城-洛陽第3地点經由移動者表』参照)(13)

孝文帝の弟元禧(咸陽王)は、491年以前に平城から刺史として転出した冀州を經由して洛陽に赴き、493年9月以後494年11月以前に司州牧・都督司豫荆鄴洛東荆等六州諸軍事に任命された。(『魏書』21上元禧伝・『北史』19同伝、『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明9年〔491〕12月の条、『魏書』7下 高祖紀下 太和19年〔495〕12月辛酉の条)(14)

註

- (1)以上、第1章・第2章・第3章の3章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都-宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて-」(1)(『琉球大学法文学部 人間科学科紀要』27 2012年)に掲載。
- (2)以上、第4章・第5章の2章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都-宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて-」(2)(『琉球大学法文学部 人間科学科紀要』29 2013年)に掲載。
- (3)以上、第6章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都-宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて-」(3)(『琉球大学法文学部 人間科学科紀要』31 2014年)に掲載。
- (4)以上、第7章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都-宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて-」(4)(『琉球大学法文学部人間科学科紀要』32 2015年)に掲載。
- (5)洛陽遷都が一度に行われたのではなく、複数の段階を経て完了したことについては、以下の研究を参照。

①張金龍『北魏政治史研究』(甘肅教育出版社 1996年 196~198頁)

②同上『北魏政治史』7(甘肅教育出版社 2011年 257~281頁)
張氏は、遷都事業が5段階を経たと述べている。ただ尚書省の移転については、論及がない。

(6)第1次移動である孝文帝の第1回平城-洛陽行については、以下の研究を参照。

①何徳章「論北魏孝文帝遷都事件」(武漢大学歴史系魏晉南北朝隋唐史研究室編『魏晉南北朝隋唐史資料』15 武漢大学出版社 1997年)

②松下憲一「北魏の洛陽遷都」(『史朋』32 1999年、のち『北魏胡族体制論』北海道大学出版会 2007年所収)

『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年〔493〕8月己丑の条では、歩兵・騎兵、合計100万余りと称した。①何徳章氏の研究では、平城出發時の人数が『北史』3 魏本紀3 太和17年(493)10月乙巳の条掲載の数値である30万で、洛陽に至る道中において各地から兵士が合流した結果、洛陽到着時には『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年〔493〕8月己丑の条に示す人数100万に達したと解釈している。ここでは、何徳章氏に従い、少ない方の30万を平城から洛陽への移動者の実数に近いと判断して、選んだ。

(7)幽皇后馮氏の洛陽への移動と495年8月~9月の六宮・文武官の洛陽への移動との時間上の先後関係は不明であるが、幽皇后馮氏は移動時期が確定できず、495年5月から496年7月までの間とみたが、495年5月から495年8月までの間に前に動いた可能性を含んでいる点から、便宜上幽皇后馮氏の移動を、第4次移動とし、495年8月~9月の移動を第5次移動とした。

(8)元幹(河南王、のち趙郡王)が洛陽へ到着した正確な時期は、確認できない。後で本文に記した如く、関中滞在後、かれの副官として附けられた、穆亮・薛胤・盧淵の3人中、薛胤は河北郡太守に任命され(『魏書』42 薛胤伝・『北史』36 同伝)、盧淵は平城で儀曹尚書に就任した。(『魏書』47 盧淵伝・『北史』30 同伝)。穆亮は493年10月に孝文帝により李冲・董爵とともに徴召され、洛陽城造営に当たった。(『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年〔493〕10月戊寅の条、『魏書』105之4 天象志4、

『北史』3 魏本紀3 太和17年〔493〕10月戊寅の条）

元幹（河南王、のち趙郡王）は、494年2月孝文帝が洛陽に滞在していた間に河南王から趙郡王に徙封され、冀州刺史に任命されて洛陽を出立する際、孝文帝に見送られた。（『魏書』7下 高祖紀下 太和18年〔494〕2月丙申の条、『北史』3 魏本紀上 太和18年〔494〕2月丙申の条、『魏書』21上元幹伝・『北史』19同伝）孝文帝が同年2月に第1回洛陽－平城行に出発する直前であり、洛陽において封ぜられたとみられる（『魏書』7下 高祖本紀下 太和18年〔494〕2月壬寅の条、『北史』3 魏本紀3 太和18年〔494〕2月壬寅の条）元幹（河南王、のち趙郡王）は、494年2月には洛陽に居たと考えられる。南齊進撃別働隊が班師して関中にいた時期は、孝文帝が洛陽遷都を宣言した493年9月以後であろう。関中から洛陽との距離が、関中から平城との距離に比べて短い点を考慮するならば、洛陽に赴いて孝文帝の親征軍に合流したと見る方が自然なように思われる。総帥の元幹（河南王、のち趙郡王）、副官の穆亮が洛陽に居た時期に照らして、南齊進撃別働隊が洛陽に到着したのは、493年9月から494年2月までの間であろう。

- (9)元休（安定王）は、2回に亘り、平城から洛陽へ移動した。他に平城・洛陽間を移動したのとして、元澄（任城王）・元詳（北海王）・元勰（彭城王）・于烈が挙げられる。
- (10)元恂（廢太子）は、平城から洛陽へ移動した時期は不明である。495年3月に他界した馮熙のために平城で举行される葬儀に参加するために、495年5月に第1回南齊親征行から洛陽へ帰還した孝文帝により洛陽から派遣された。（『魏書』22元恂伝・『北史』19同伝）このことから、495年5月には洛陽に居たことは確かである。孝文帝が第1回平城－洛陽行に出発した493年8月から495年5月までの間に洛陽に移動した。恐らく、孝文帝の第1回平城－洛陽行時には平城に留まり、495年5月以前の大規模な移住群に混ざって洛陽へ移ったと考えられる。495年5月以前の大規模な移住は、第2次移動（493年10月以後、494年7月以前）か第3次移動（494年10月～11月）である。第2次移動（493年10月以後～494年7月以前）は第1回平城－洛陽行の随従者を

迎えに行ったものであり、孝文帝の近親者を多く含む第3次移動(494年10月～11月)の方が可能性が高い。

(11)遊撃は493年8月に名目上の「南斉討伐」軍を興す直前に諫止した後、太子中庶子に任命され(『魏書』55遊撃伝・『北史』34同伝)、494年9月に平城において孝文帝が自ら行った考課では、太子中庶子として「中」という評価を付された。(『魏書』21上元羽伝・『北史』19同伝)太子中庶子の後、先に孝文帝の第1回平城-洛陽行に従って493年9月に洛陽に到着し、496年5月に相州刺史・鎮北大將軍に洛陽から転出した元楨(南安王)の属僚となった。(『魏書』19下元楨伝・『北史』18同伝、『魏書』55遊撃伝・『北史』34同伝)その間、太子中庶子として仕えていた元恂(廢太子)とともに、孝文帝の第2回平城-洛陽行に従って洛陽に移動したと見られる。

(12)尚書左僕射であった元賛は、就任時期は不明であるが、孝文帝が493年8月に留守として平城に残留した。(『北史』15元賛伝)そして494年9月に平城において孝文帝自ら実行した考課を受け、兼任官であった太子少師を解任され、奪禄1周という処分に付された。但し尚書左僕射までも解かれたわけではなく、その後も続任し、任在中世を去った。孝文帝は毎年南斉親征を行う際に、その手を取って後事を託したと言う。後事を託したのは、孝文帝が洛陽遷都を計画していた時に、反対者が多い中で賛意を示して信頼を得たからである。(『北史』15元賛伝)孝文帝が毎年行つたと表現される南斉親征とは、第1回南斉親征行(494年12月～495年5月)・第2回南斉親征行(497年8月～499年正月)・第3回南斉親征行(499年3月～499年4月)の中、次の第2回親征行とは期間が2年以上離れている第1回親征行ではなく、2ヶ月しか間を置いていない第2回親征行と第3回親征行であろう。孝文帝が後事を託したのは、第2回親征行と第3回親征行に出発する洛陽においてであろう。死後、留守賛輔の功績により、爵を上谷侯から晋陽県伯に進められた。(『北史』15元賛伝)進爵されたのは、孝文帝の生前の可能性が高い。進爵が孝文帝の生前であるならば、499年3月に孝文帝が第3回南斉親征行に向かうのを洛陽で見送った後で

あるかと推察される。とすれば、元贊の亡くなった時期は、499年4月に孝文帝が薨去する以前、499年3月か4月であろう。となると、尚書左僕射の在任時期は、少なくとも考課を受けた494年9月から499年3月または4月までであると言える。その間、孝文帝が第2回南斉親征行に出発する497年8月以前に平城から洛陽へ移動した。元丕と陸叡は、馮熙の葬礼に参ずるよう要請した結果、495年に各々録尚書事・尚書令を免職されたとみられる。元贊が当時尚書左僕射を免官された事実が認められない点から、元丕と陸叡の2名が平城の尚書省から去った後も残り、平城の尚書省の運営に当たり、結局495年8月に平城を去って9月に洛陽に到着し、以後2回の南斉親征行に従った孝文帝の留守を預かりながら、499年の他界まで尚書省左僕射の任を勤め上げたと推察される。

（13）穆亮以外に、元幹（河南王、のち趙郡王）の副将であったのは、盧淵及び薛胤である。

盧淵は、493年8月以来元幹（河南王、のち趙郡王）に同道した後、儀曹尚書を拝した。（『魏書』47盧淵伝・『北史』30同伝）494年9月に平城において孝文帝が自ら行った考課では、散騎常侍一周分を削られた。（『魏書』21上元羽伝・『北史』19同伝、『魏書』47盧淵伝・『北史』30同伝、『資治通鑑』139 齊紀5 明帝建武元年〔494〕9月壬午の条）493年8月以降、494年9月までの間に平城に戻り、儀曹尚書に任命されて、考課を受けたのである。

次いで豫州刺史に任命されたが、母親の老齢であることを理由に固辞した。その後、494年11月に南斉の雍州刺史曹虎が投降を申し入れたのを受けて、翌12月に使持節・安南將軍に任ぜられて、曹虎を迎える目的で洛陽から出発する。孝文帝の第1回親征軍の前鋒諸軍を率いて、樊州・鄧州に赴き、元贊（城陽王）・李佐・韋珍とともに赭陽攻撃に参加したが、失敗して官爵を免ぜられた。（『魏書』47盧淵伝・『北史』30同伝、『資治通鑑』139 齊紀5 武帝建武元年〔494〕12月辛丑朔の条及び12月の条）盧淵は洛陽から軍を率いて出発して南下したとみられる。

盧淵がいつ如何なる経緯で洛陽へ赴いたかは不明であるが、一族盧氏と洛陽で3世代に亘って100口が同居共財を営んだことが確認される。〔『魏書』47・『北史』30同伝〕494年9月平城において考課を受けた後、494年12月に親征軍の一翼を担って洛陽を進発するまでの間に、洛陽へ移住したのであろう。恐らく、第3次移動(494年10月～11月)に参加して洛陽へ赴いたとみられる。

薛胤は帰還の途中で、都將に任命され、秦州の反乱を鎮圧し、支酋を捉えた。その後河北太守に転じた。〔『魏書』42薛胤伝〕

- (14)元禎は司州牧から長兼太尉に遷った。長兼太尉に任命されるのは、495年12月である。〔『魏書』7下 高祖紀下 太和19年〔495〕12月辛酉の条、〔北史』3 魏本紀3 太和19年〔495〕12月辛酉の条〕司州牧に就いた時期は、495年12月に長兼太尉に任命される以前であるから、晚くとも495年ということになる。孝文帝は494年に正月と11月の2度に亘り相州汲郡にある殷比干墓を訪れた〔『魏書』7下 高祖紀下 太和18年〔494〕正月戊辰の条・11月甲申の条、〔北史』3 魏本紀3 太和18年〔494〕正月戊辰の条・11月甲申の条〕。第2回目訪問時には自ら弔文を草し、碑に刻んだ。碑陰には随臣の姓名をその任する官名とともに記した。その1人に、元禎の名がみえる。その官は、「使持節・驃騎大將軍・都督司豫荆郢洛東荆六州諸軍事・開府・司州牧」と記されている〔『金石粹編』27 北魏1 「孝文弔殷比干墓文碑陰」〕。即ち494年11月の時点で司州牧・都督司豫荆郢洛東荆六州諸軍事にすでに任命されていたのである。494年11月に孝文帝が洛陽に帰還すると同時に南齊の雍州刺史曹虎が襄樊から内附を表明した時には〔『魏書』7下 高祖紀下 太和18年〔495〕11月己丑の条、〔北史』3 魏本紀3 太和18年〔495〕11月己丑の条には該当記事なし〕、孝文帝は自ら迎えに赴くべきか否か、その対応策を巡って、臣下と協議した。結局、孝文帝は自ら出迎えることに決定して、翌12月辛亥に洛陽を出立した〔『魏書』7下 高祖紀下 太和18年〔494〕12月辛亥の条、〔北史』3 魏本紀3 太和18年〔494〕12月辛亥の条、〔魏書』19

中元澄伝・『北史』18同伝）。当時孝文帝の協議相手となった人物として、元澄（任城王）・元颺（彭城王）・馮誕・穆亮・李冲に加えて、元禧（咸陽王）が加わっていたことが認められる（『魏書』19中元澄伝・『北史』18同伝）。元禧（咸陽王）は494年12月の時点で洛陽に居たことが確認される。しかも当時司州牧であったのである。『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明9年（491）12月の条では、491年に司州牧・都督司豫等六州諸軍事に任命されたと記述されているが、『魏書』106中 地形志中 洛州では、洛陽に司州が置かれたのは、493年となっている。『魏書』106上 地形志上 恒州には、道武帝代天興年間（398～403）に司州を設置し、代都平城を治所と定め、孝文帝代太和年間（477～499）に恒州に改めたと記されている。また『魏書』106上 地形志上 司州では、道武帝代401年に鄴城を治所として相州が置かれて、東魏孝静帝代534年に遷都して司州に改めた旨が述べられている。北魏において、司州は王都及びその周辺地区から成る行政地区である点に照らして、洛陽に司州が設置されたのは、『魏書』106中 地形志中 洛州に述べる如く、洛陽への遷都が宣言された493年であったことは確かであろう。元禧が任命された司州牧は、『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明9年（491）12月の条によると、都督司豫等六州諸軍事を兼任している点から、洛陽及び豫州等周辺地区を統治する任務を負っていたとみられる。したがって、『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明9年（491）12月の条に元禧が司州牧・都督司豫等六州諸軍事に任命されたと記述されている記事は、年代を誤っているものであり、早くとも『魏書』106中 地形志中 洛州に言う493年に繋げるべきのものであろう。元禧（咸陽王）は494年12月の時点で冀州刺史から司州牧にすでに転任して洛陽に居たが故に、南齊の雍州刺史曹虎が帰属を申し入れた時に洛陽で開かれた孝文帝を囲む善後策の協議に参加したのであろう。恐らく元禧は493年に洛陽に司州が置かれたと同時に司州牧に任命され、冀州刺史から転任してきた可能性が高い。司州牧転任後、時期は不明だが一旦平城に赴き、494年に第3次平城－洛陽移動（第2回孝文帝平

城—洛陽行)に従い、途中孝文帝とともに股比干墓に参ったのであろう。

北魏平城—洛陽直接移動者表

移動年次	孝文帝行幸回数	移動者名	典 拠
第1次移動 (493年8月～9月)	第1回孝文帝平城—洛陽行	①元提 (臨淮王)	『魏書』18元提伝・『北史』16同伝
		②元休 (安定王) (1回目)	『魏書』19下元休伝・『北史』18同伝
		③元澄 (任城王) (1回目)	『魏書』19中元澄伝・『北史』18同伝
		④元植 (南安王)	『魏書』19下元植伝・『北史』18同伝
		⑤元鸞 (城陽王)	『魏書』19下元鸞伝
		⑥元詳 (北海王) (1回目)	『魏書』21上元詳伝・『北史』19同伝
		⑦元徽 (彭城王) (1回目)	『魏書』21上元詳伝・『北史』19同伝、『魏書』21上元徽伝・『北史』19同伝
		⑧于烈 (1回目)	『魏書』31于烈伝・『北史』23同伝
		⑨宇文福	『魏書』44宇文福伝・『北史』25同伝
		⑩李神	『魏書』53李神伝・『北史』100序伝
		⑪劉芳	『魏書』55劉芳伝・『北史』42同伝
		⑫韓顯宗	『魏書』60韓顯宗伝・『北史』40同伝、『資治通鑑』1

			39 齊紀5 明帝 建武元年（494） 正月乙亥の条
		⑨李彪	『魏書』62李彪伝 ・『北史』40同伝
		⑩張彝	『魏書』64張彝伝 ・『北史』43同伝
		⑬崔光	『魏書』67崔光伝 ・『北史』44同伝
		⑯楊大眼	『魏書』73楊大眼 伝・『北史』37同 伝
		⑳成淹	『魏書』79成淹伝 ・『北史』46同伝
		㉑馮誕	『魏書』19下元休 伝・『北史』18同 伝
第2次移動 （493年10月以 後～494年7月以 前）		①元休（安定王） （2回目）	『魏書』7下 高祖 本紀下 太和17年 （493）10月乙 巳の条・『北史』3 魏本紀3 太和17 年（493）10月 乙巳の条、『魏書』 19下元休伝・『北 史』18同伝
		②元休（安定王）率 領の第1次移動者 （第1回孝文帝平城 ～洛陽行隨行者）の 家族	『魏書』7下 高祖 本紀下 太和17年 （493）10月乙 巳の条・『北史』3 魏本紀3 太和17 年（493）10月 乙巳の条、『魏書』 19下元休伝・『北 史』18同伝
第3次移動 （494年10月～ 11月）	第2回孝文帝平城～ 洛陽行	①元澄（任城王） （2回目）	『魏書』19中元澄伝・ 『北史』18同伝、『金 石粹編』27 北魏「 孝文帝股比干墓文 碑陰」

②元禧 (咸陽王) (2回目)	『金石粹編』27 北魏1 「孝文帝 比干墓文碑陰」
③元雍	『魏書』21上元雍 伝・『北史』19同 伝
④元羽	『魏書』21上元羽 伝・『北史』19同 伝、『金石粹編』 27 北魏1 「孝文 帝股比干墓文碑陰」
⑤元詳 (北海王) (2回目)	『魏書』21上元詳 伝・『北史』19同 伝、『金石粹編』2 7 北魏1 「孝文 帝股比干墓文碑陰」
⑥元懿 (彭城王) (2回目)	『魏書』21上元詳 伝・『北史』19同 伝、『金石粹編』2 7 北魏1 「孝文 帝股比干墓文碑陰」
⑦元恂 (廢太子)	『魏書』7下高祖紀 下 太和17年(4 93)6月乙未の条、 『魏書』22元恂伝 ・『北史』19同伝、 『魏書』108之4 礼志4
⑧元徽	『金石粹編』27 北魏1 「孝文帝 比干墓文碑陰」
⑨元景	同上
⑩元纂	同上
⑪元翰	同上
⑫元蚪	同上
⑬元唐	同上
⑭元宜	同上
⑮元洛平	同上
⑯長孫獫 (拔拔獫)	同上

⑦伊願(伊婁願)	同上
⑧独孤遙	同上
⑨穆亮(丘目陵亮)	同上
⑩穆純(丘目陵純)	同上
⑪穆惠(丘目陵惠)	同上
⑫于烈(2回目)	『魏書』31 于烈伝 ・『北史』23 同伝
⑬于勁(万世于勁)	『金石粹編』27 北魏1 「孝文帝殷 比于墓文碑陰」
⑭于弁(万世于弁)	同上
⑮于吐拔(万世于吐拔)	同上
⑯于澄(万世于澄)	同上
⑰陸昕之(陸昕)	同上
⑱陸恂道	同上
⑲李愨(大野愨)	同上
⑳陳益(侯莫陳益)	同上
㉑叔孫恬(乙崩恬)	同上
㉒叔孫免(乙崩免)	同上
㉓叔孫侯莫干(乙崩 侯莫干)	同上
㉔間驍(郁久間驍)	同上
㉕宇文福(侯文福)	同上
㉖呂阿倪(侯呂阿倪)	同上
㉗羅吐蓋(叱羅吐蓋)	同上
㉘苟侯莫仁(若干侯 莫仁)	同上
㉙叔孫忠仁(乙崩忠 仁)	同上
㉚山畏命(吐羅畏命)	同上
㉛間敏(郁久間敏)	同上
㉜斛律憲	同上
㉝莫悅(莫爾婁悅)	同上
㉞何舍(賀拔舍)	同上
㉟馮誕	同上

㊦ 李韶	同上
㊦ 李彦	『魏書』39 李彦伝・ 『北史』100 同伝
㊦ 盧淵	『魏書』47 盧淵伝・ 『北史』30 同伝
㊦ 崔光	『金石粹編』27 北魏1 「孝文弔殷 比干墓文碑陰」
㊦ 崔哲	同上
㊦ 崔広	同上
㊦ 崔逸	同上
㊦ 李預(趙郡)	同上
㊦ 李華	同上
㊦ 李引	同上
㊦ 李良執	同上
㊦ 鄭長遊	同上
㊦ 王翔	同上
㊦ 劉芳	『魏書』55 劉芳伝 ・『北史』42 同伝
㊦ 游肇	『魏書』21 上元羽伝・ 『北史』19 同伝、『魏 書』19 下元植伝・『北 史』18 同伝、『魏書』 55 游肇伝・『北史』 34 同伝、『金石粹編』 27 北魏1 「孝文弔 殷比干墓文碑陰」
㊦ 游綏	『金石粹編』27 北魏1 「孝文弔殷 比干墓文碑陰」
㊦ 公孫良	『魏書』62 高道悦 伝・『北史』40 同 伝、『金石粹編』 27 北魏1 「孝文 弔殷比干墓文碑陰」
㊦ 李堅	同上
㊦ 秦松	同上

		◎郭祚	同上
		◎董明忠	同上
		◎衛況	同上
		◎李循	同上
		◎甄琛	同上
		◎双蒙	同上
		◎邢愷	同上
		◎魏祐	同上
		◎章續	同上
		◎白整(白牧)	同上
		◎劇順	同上
		◎徐丹	同上
		◎張代運	同上
		◎張琮	同上
		◎張度	同上
		◎傅永(傅脩期)	同上
		◎裴映	同上
		◎高觀	同上
		◎司馬定	同上
		◎朱孟孫	同上
		◎蕭彥	同上
		◎柳崇	同上
		◎成淹	同上
第4次移動 (494年12月以後 -495年3月以前)		①孝文廢皇后馮氏	『魏書』13廢皇后馮氏伝・『北史』13同伝
第5次移動 (495年9月以後 -497年7月以前)		①孝文幽皇后馮氏	『魏書』13幽皇后馮氏伝・『北史』13同伝、『魏書』13廢皇后馮氏伝・『北史』13同伝
第6次移動 (495年8月-9月)		①元贊	『魏書』7下・高祖紀下太和19年(495)9月庚午の条、『北史』3魏本紀3 太和19年(495)9月の条、『魏書』21上元羽伝・『北史』19同伝、『北史』15元贊伝

平城-洛陽第3地点經由移動者表

移動年	經由地	移動者名	典拠
493年9月以後494年11月以前	冀州	元禧(成陽王) (1回目)	『魏書』21上元禧伝・『北史』19同伝、『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明9年(491)12月の条、『魏書』7下 高祖紀下 太和19年(495)12月辛酉の条
493年10月	関中 (南齊攻撃別働隊)	穆亮	『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明11年(493)8月己丑の条、『魏書』21上元幹伝・『北史』19同伝、『魏書』7下 高祖本紀下 太和17年(493)10月戊寅の条、『魏書』105之4 天象志4、『北史』3 魏本紀3 太和17年(493)10月戊寅の条、『資治通鑑』138 齊紀4 武帝永明11年(493)10月戊寅朔の条
493年10月以後 494年2月以前	関中 (南齊攻撃別働隊)	元幹(河南王、のち趙郡王)	『資治通鑑』137 齊紀3 武帝永明11年(493)18月己丑の条、『魏書』21上元幹伝・『北史』19同伝